

# 交流文化

立教大学観光学部編集

2012.  
volume

13

13  
交流文化



特集  
世界遺産

特集  
世界遺産

立教大学  
観光学部

交流文化 13 ©2012  
立教大学観光学部

ISBN 978-4-9902598-9-1

特集

## 02 世界遺産

## 04 世界遺産と観光

羽生冬佳

## 18 イタリア・ウルビーノにおける 景観論争と文化遺産の 保全のあり方

清野隆

## 28 座談会 世界遺産のインパクトをどう考えるか

ファム ホン ロン／センサティット シモンケオ／  
ラナワカ チャトゥシカ／市川哲（司会）

## 38 「交流文化」フィールドノート⑩ ブルネイ、マレーシアとの 相互交流ホームステイ

舛谷研究室

## 44 読書案内 『世界遺産学への招待』 『イタリアの街角から－スローシティを歩く－』

## 46 最近の講演会から アジアのディアスポラ文学

©「地球の歩き方」エジプト編提供





[特集]

# 世界遺産

WORLD  
HERITAGE

1972年に国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)総会で「世界遺産条約」が採択されてから今年で40年を迎えた。「世界遺産」は、本来、紛争や開発から文化・自然遺産を保護するための枠組みである一方、今日の観光において強力なブランドとなり、遺産保護と観光の関係をめぐって、多くの課題が山積している。本号では、世界各地の事例から「世界遺産」と観光の関係を考えてみたい。



# 世界遺産と観光

写真 羽生冬佳

近年、国内外で「世界遺産」を観光誘致に結びつけようとする動きが見られる。だが、世界遺産になれば本当に観光客が押し寄せるのか。国際的な議論と検証を通して、世界遺産が内包する矛盾と観光をめぐる問題を考える。

はじめに

2011年のGW明けにもたらされた「平泉の世界遺産への登録、ほぼ確実に」のニュースは、同年3月に発生した東日本大震災の被災地ならびに日本全国にとって明るい話題となった。実際には同年6月、パリで開催される第35回世界遺産委員会にて登録の決定をみるのであるが、その決定に先立ち東北地方

大いに世界遺産に期待を寄せ盛り上がりを見せた。実際に、GW期間中の平泉の観光客数が前年と比較して8割減であったのに対し、先の登録内定のニュースがもたらされた後は、急速にその効果が現れ観光客の足が戻り始めた様子が伝わっている。泉の発表によれば、平泉町への観光客数は6月には前年の9割程度、7月以降は前年を上回る。また、岩手県全体にも波及し、6月以降の観光客数は前年

の8〜9割程度に回復している(図1)。

こうした被災地の状況を見るまでもなく、「世界遺産」にかける地域の期待は大きい。現在はやや下火になったものの、以前は「わが地域にも世界遺産を」との運動は日本各地でみられた。また、世界に目を転じて「わが国に世界遺産を」との動きは、一種政治的な様相を呈してきている。その裏には、「世界遺産になれば地名度が高まり、観光客が増加す

図1) 平泉町の月別観光客数

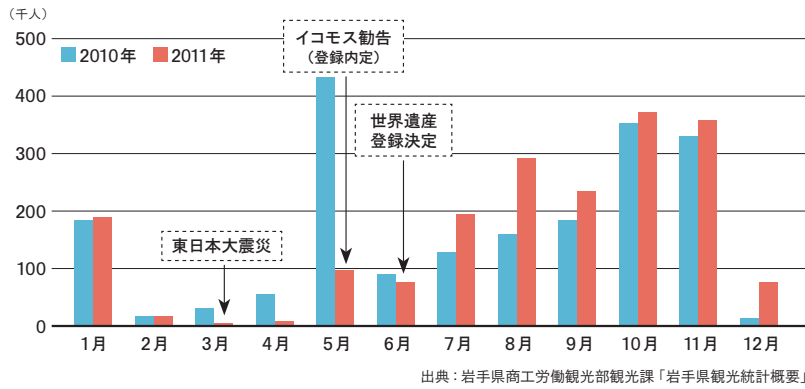
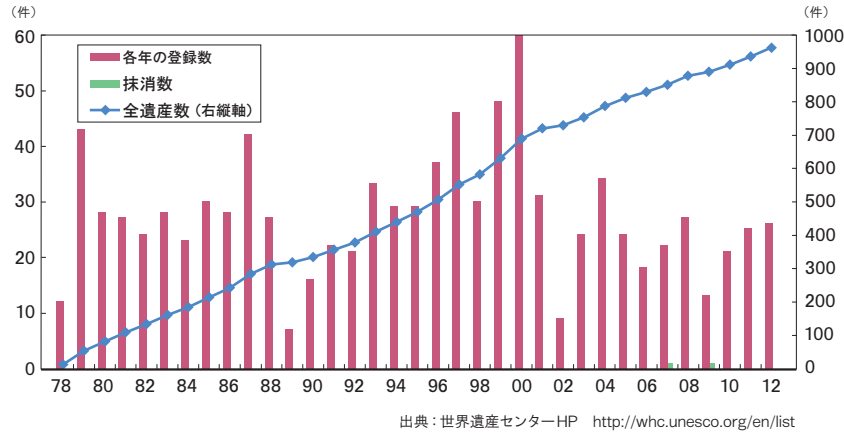


図2) 世界遺産登録数の推移



ユネスコの救済キャンペーンによって移築されたアブ・シンベル神殿 (アブ・シンベルからフィラエまでのヌビア遺跡群、1979年登録)

©「地球の歩き方」エジプト編提供



「世界遺産」と「観光」とは結びつけられて語られることが多いが、そもそも世界遺産とは「権威付けられた観光地」でも「〇〇巡りの対象地」でもない。最近では新聞紙上やニュース解説などでもこのことが指摘されるようになってきてはいるが、「見る価値のある『すごいもの』なんですよ」という漠然とした認識がまだまだ多いのではないだろうか。

本稿では世界遺産の制度を概説し、少しでも理解をしていただいた上で、世界遺産と観光の関係について述べていきたい。

「世界遺産」とは？

世界遺産とは、1972年にユネスコ(UNESCO)国連教育科学文化機関)で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に規定されている「世界遺産リスト(World Heritage List)」に記載された自然遺産および文化遺産のことである。2012年現在、962件の遺産が登録されており、その数は年々増えている(図2)。

歴史的な流れとしては、著名なアブ・シンベル神殿の移設に代表されるエジプト・ヌビア遺跡救済キャンペーンの成功や、それに続

くフイレンツェ・ヴェネツィア(イタリア)の大洪水被害からの美術品救済、あるいはポロブドゥール仏教遺跡(インドネシア)等での遺跡救済キャンペーンが条約成立のきっかけとなっている。1960〜70年代に展開されたこれらの事業は、自国での遺跡の救済や修復が困難なことから、ユネスコに国際的な援助要請が出されたものである。ユネスコの正規予算によるものではなく、個別の案件に対する各国や民間からの拠出金によって賄われる、いわば「例外的」な事業であった。しかし、これら救済キャンペーンでの成功をみた各国からは自国の遺跡に対する支援要請が増加する。ユネスコは次第に遺跡の救済や修復の事業を正規の文化活動の一部とするともに、世界の文化遺産を選択して保護・保存するシステムづくりに取り組み始めた。同じ頃、アメリカやIUCN(国際自然保護連合)を中心として、自然と文化双方を含めた「世界遺産トラスト」の草案の準備が進められていた。双方の条約が重複していたことから、最終的にはユネスコにおいて文化遺産および自然遺産を統合した条約が1972年に成立をみたのである。

同条約では、世界遺産の保護は国際社会全

体が協力して行うべき義務であるとされ、「顕著で普遍的な価値(OUV: Outstanding Universal Value)」を有する遺産がリストに登録される。また、各国は自国内に存在する遺産を「認定し、保護し、保存し、整備活用し、またべき世代へ伝承すること」が義務として課せられる。すなわち、世界遺産リストは、世界が協力して守るべき遺産の準備リストとも言える。リストに掲載された遺産が危機に瀕していると判断される場合、別途「危機にさらされている世界遺産リスト(危機遺産リスト)」(表1)としてリストアップされ、保有国に対して保護のための対策を取ることが要請されると共に、必要であれば国際的な支援が実施される。

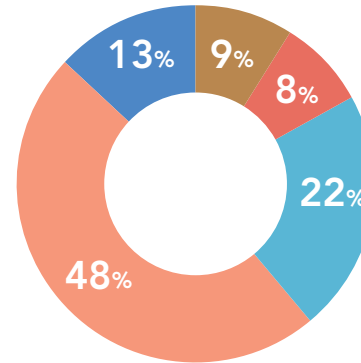
世界遺産リスト、および危機遺産リストは毎年開催される世界遺産委員会において更新される。世界遺産リストは前述の通り増加の一途をたどっているが、危機遺産リストは保護の措置が十分になされた場合、危機状況から脱したのとしてリストから削除される。2012年現在、表1に示す38件が掲載されている。これは過去最高の件数である。大規模な再開発計画が持ち上がっているイギリスのリヴァプール海商都市(2004年登録、な

表1) 危機遺産リスト (2012年7月現在)

世界遺産名 (C: 文化遺産 N: 自然遺産)	国名	世界遺産 リスト登録年	危機遺産 登録年
エルサレム旧市街とその城壁群 (C)	エルサレム (ヨルダン・ハシエミット王国による申請遺産)	1981	1982
チャン・チャン遺跡地帯 (C)	ペルー共和国	1986	1986
ニンバ山厳正自然保護区 (N)	コートジボワール共和国及びギニア共和国	1981,1982	1992
アイールとテネレの自然保護区群 (N)	ニジェール共和国	1991	1992
ヴィルンガ国立公園 (N)	コンゴ民主共和国	1979	1994
シミエン国立公園 (N)	エチオピア連邦民主共和国	1978	1996
ガランバ国立公園 (N)	コンゴ民主共和国	1980	1996
カフジ-ピエガ国立公園 (N)	コンゴ民主共和国	1980	1997
オカピ野生生物保護区 (N)	コンゴ民主共和国	1996	1997
マノヴォ-グンダ・サン・フローリス国立公園 (N)	中央アフリカ共和国	1988	1997
サロンガ国立公園 (N)	コンゴ民主共和国	1984	1999
古都ザビド (C)	イエメン共和国	1993	2000
アブ・メナ (C)	エジプト・アラブ共和国	1979	2001
ジャムのミナレットと考古遺跡群 (C)	アフガニスタン・イスラム共和国	2002	2002
パーミヤン渓谷の文化的景観と古代遺跡群 (C)	アフガニスタン・イスラム共和国	2003	2003
アッシュール (カラット・シェルカット) (C)	イラク共和国	2003	2003
コモエ国立公園 (N)	コートジボワール共和国	1983	2003
バムとその文化的景観 (C)	イラン・イスラム共和国	2004,2007	2004
キルワ・キシワニとソングムナラの遺跡群 (C)	タンザニア連合共和国	1981	2004
ハンバーストーンとサンタ・ラウラ硝石工場群 (C)	チリ共和国	2005	2005
コロとその港 (C)	ベネズエラ・ボリバル共和国	1993	2005
コソヴォの中世建造物群	セルビア共和国 (※)	2004,2006	2006
都市遺跡サーマッラー (C)	イラク共和国	2007	2007
ニオコロ-コバ国立公園 (N)	セネガル共和国	1981	2007
ムツヘタの文化財群 (C)	グルジア	1994	2009
ロス・カティオス国立公園 (N)	コロンビア共和国	1994	2009
ベリーズのバリア・リーフ保護区 (N)	ベリーズ	1996	2009
エヴァグレース国立公園 (C)	アメリカ合衆国	1979	2010
カスピのブガンダ王国歴代国王の墓 (C)	ウガンダ共和国	2001	2010
バグラティ大聖堂とゲラティ修道院 (C)	グルジア	1994	2010
アツィナナナの雨林群 (N)	マダガスカル共和国	2007	2010
スマトラの熱帯雨林遺産	インドネシア共和国	2004	2011
リオ・プラタノ生物圏保護区	ホンジュラス共和国	1982	2011
パナマのカリブ海沿岸の要塞群: ポルトベロとサン・ロレンソ (C)	パナマ共和国	1980	2012
トンブクトウ (C)	マリ共和国	1988	2012
アスキア墳墓 (C)	マリ共和国	2004	2012
リヴァプルー海商都市 (C)	英国	2004	2012

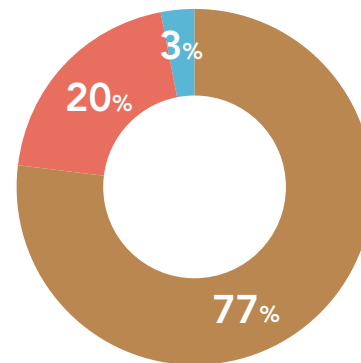
出典: 日本ユネスコ協会連盟 世界遺産活動HP <http://www.unesco.or.jp/isan>

図3) 世界遺産登録数の地域別比率



- アフリカ諸国
- アラブ諸国
- アジア太平洋
- 欧州・北米
- 中南米

図4) 世界遺産登録数の種類別比率



- 文化遺産
- 自然遺産
- 複合遺産

出典: 世界遺産センターHP <http://whc.unesco.org/en/list>

らびに武力紛争が激化し遺産の破壊が実際に起こっているマリ、トンブクトウ(1988年登録)、アスキア墳墓(2004年登録)の2つの遺産が新たに危機遺産として登録されたことが大きく報道された。

このように、世界遺産条約の原点に立ち返れば、「世界遺産」リストに掲載されている遺産「のみがもてはやされていることや、リストへの遺産の登録を目的とする」とは、本来の主旨からずれていると言わざるを得ない。現在、途方もない数が世界遺産リストに掲載されるようになったことで、遺産の保全状況をチェッ

クする業務が十分行えなくなることが懸念されている。さらに、件数が増えすぎること、世界遺産の価値が相対的に下がる」という指摘も一部みられる。既に世界遺産委員会は遺産の登録申請に一定の制限を設け、できるだけ増加のスピードを緩和しようとして試みている。

また、すでに多くの遺産を有しており、遺産の調査や推薦書作成のノウハウに長けている国と、近年条約に加盟し、調査や推薦書作成にあたって予算もノウハウも不足している国との間で登録件数の格差が生じている。地域別にみるとヨーロッパ・北米諸国に全体の

約半数の遺産が集中しており(図3)、上位20位までの国々の保有数が全体の半数を超えている(2012年現在、日本は16件で14位)。また、条約加盟国189カ国のうち、世界遺産を保有していない国は32カ国にのぼり、自国の遺産の登録を切望している。

さらに遺産の内訳をみると、文化遺産が全体の4分の3を占めており(図4)、特に種別として都市関連やキリスト教関連遺産に偏りが見られることも長らく課題視されている。前述の地理的な偏りとともに世界遺産が「西洋中心主義」であるとの批判が高い。こ



上：インド・アジャンタ石窟群（1983年）。第1窟は石窟内の劣化を防ぐために、石窟内に同時に入る観光客の数が制限されている 中：小笠原諸島（2011年登録）。森林生態系保護地域に入る際に、服と靴についた種子などを除去するための装置が設置されている 下：メキシコ・チチェン・イツァ遺跡（1988年登録）の近くのレストランで披露されるマヤの伝統的な踊り

した地理的・テーマ的アンバランスを解消し、リストの信頼性を高めるべく、世界遺産委員会は1994年にグローバル・ストラテジーを採用し、文化的景観、産業遺産、近代建築、文化的ルートといった新たな概念を取り入れることで遺産の多様性を高めようとしている。わが国においても、2004年登録の熊野古道や2007年登録の石見銀山は「文化的景観」としての評価を受けたものである。初期に登録された姫路城や法隆寺が「最古の木造建築物」「日本独特の城郭建築の最盛期の建築」といった分かりやすい価値で評価されていたのに対して、熊野古道や石見銀山はその文化的背景を踏まえなければ価値が理解しにくい、背景にはこうした国際的な動きがある。

## 世界遺産と観光をめぐる国際的な議論

次に、本題である「世界遺産」と「観光」との関係についての国際的な議論を述べていきたい。

世界遺産条約の条文の中で唯一「観光」の文字がみられるのは、「危機にさらされている遺産」に関する条項においてである。危機の一例として「急速に進む損壊」「武力紛争の発

生」「大規模な災害」などと並んで「急激な都市開発事業もしくは観光開発事業に起因する滅失の危険」と挙げられているのみで、条約上はほとんど意識されていない。

しかし、かつては遺産の保護と観光を積極的に結びつけようとする考え方もあった。前述のヌビア遺跡やボロブドゥール遺跡の救済キャンペーンが展開されていた60年代、遺産を一般に広く公開することを文化的活動の一部と位置づけ、さらには観光を通じて経済発展に寄与することが意識されるようになった。背景には、国連が1967年に「国際観光年」に指定するなど国際観光が飛躍的に発展したことがある。開発計画の中で観光が高い地位を与えられるとともに、観光資源としての遺産の重要性が高まった。観光を通じて遺産保護に対する理解を深め、そのための資金を調達することが期待される。さらには国連が有する種々の「経済発展のための」援助資金の対象となることが可能となり、それまでのユネスコが指向していなかった特定地域への直接的な関与が実行されるようになった。

しかし、急激な観光客の増加は一転して遺産にとって「脅威」と捉えられるようになる。観光という、受け入れ地側、観光客側の両サ

イドとも様々な人々が関与する事象は、遺産の管理という立場の予想をはるかに上回る急激かつ大規模な動きであり、また、遺産そのものだけでなく周辺地域の状況や観光客が発生する市場との関わりが深いという複雑な構造をもつためである。

観光客の来訪によって、例えば植物の踏み荒らしや外来種の持ち込み、壁画等の劣化、心ない行為による深刻なダメージといったこ

とが問題となるだけでなく、遺産周辺で行われる大規模な観光開発が環境を悪化させ、さらには観光客との接触によって伝統的な文化が変容し、地域社会が急激に変化することが問題として浮上した。70年代半ばには、ユネスコ総会で過度の観光開発によって地域社会が育んできた価値観が影響を受けるといことが確認された。以降、観光と遺産保護を積極的に結びつけるのではなく、地域の住民が

遺産の保護と公開に関心を持ちながら事業に参加することで、適正な規模の開発を行うべきとの考え方に移行していく。現在では、遺産の保護のために地域社会の関与が重要であることが強調されるようになっていく。そのためには、観光産業を上手に活用することで地域の社会や経済の発展を促し、遺産への理解を求め、保護へと結びつけていくべきとの考え方に至っている。



左：姫路城（1993年登録）。日本特有の城郭建築で現存する最大のもの 右：熊野参詣道・中辺路（紀伊山地の霊場と参詣道、2004年登録）。遺産を構成する資産の一つであるが、一見では遺産としての価値は伝わりにくい

## 世界遺産地域における観光客数の増減

前項までの議論は、実は世界遺産になれば無条件で観光客が押し寄せるだろうとの前提にたっている。実際はどうであろうか。国内に限られるが、具体的データで見てみたい。

図5は、主要な世界遺産地域の観光入込み客数の推移をまとめたものである。なお、観光入込み客数を把握する上では市町村等が発表する観光統計に頼らざるを得ないが、わが国の世界遺産は「単体の施設」として運営される人の出入りを把握しやすいもの（姫路城、法隆寺など）や、複数の施設の集合（奈良、京都、琉球王国のグスク）、あるいはエリアで指定される人の出入りを把握するのが困難なもの（白川郷・五箇山、屋久島、白神山）と様々な形態が存在しており、単純に地域間比較ができないことを注意しておく必要がある。

これらの図からは、白川村、屋久島などは登録以降確実に観光客数が増加している様子が見えるが、その他の地域は登録直後にやや増加したものの、以降は横ばいの状況であったり（姫路城、日光、五箇山）、あるいは減少に転じている（法隆寺、厳島神社、知床）。白

図5) 世界遺産登録地域の観光入り込み客数の推移

### 1. 法隆寺



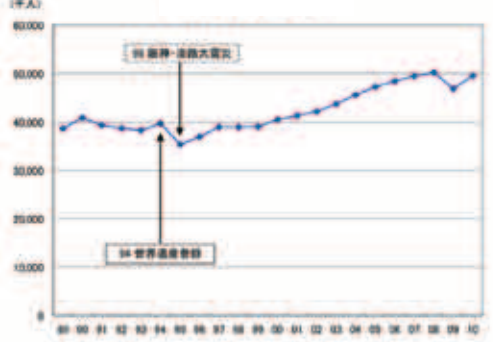
出典：奈良県観光動態調査報告書（奈良県）  
斑鳩町統計書（斑鳩町）

### 2. 姫路城



出典：姫路市入込客数・姫路市観光アンケート調査報告（姫路市）

### 3. 京都市



出典：京都市観光調査年報（京都市）

川郷や石見銀山の観光客急増の様子はマスコミでも取り上げられることが多いが、それぞれを細かく見てみると、白川村の入り込みは上昇・停滞を繰り返している。最近では2008年に180万人を超える急増をみせているが、この増加は東海北陸自動車道路の飛騨清見IC―白川郷ICが開通したことにより東海地方と北陸地方とを結ぶ縦断道が全通したことによる影響が大きい。03年にはほぼ頭打ちをしたように見えたことから、当時「世界遺産の賞味期限は10年」との見方もあった。

さらに、石見銀山については登録の数年前から微増傾向がみられ、登録年および翌年には飛躍的に増加したものの、翌々年の09年には急激に減少に転じており、10年にはほぼ登録前の水準に戻っている。

以上から分かるように、実態としては一概に「世界遺産＝観光客が増える」という単純な構図とはなっていない。一時的に増加したとしてもそれは一過性のものであるケースが多く、おそらくは「登録」という話題性からマスコミが頻繁に取り上げたり、あるいは観光地の目玉として派手な宣伝が行われるといったことが、人々の耳目をひいたことの結果と考えられる。

観光客数の増減には多様な要素が影響しており、短期的に変動する。その要素の一つとして「世界遺産」の看板は有効ではあるものの、決して十分ではない。観光客は遺産の範囲の中だけで行動するのではない。一連の観光行動の一部として組み込まれているのみで、その前後には自宅から遺産地域までの移動や、宿泊、飲食、土産物の購入、あるいは別の場所を訪れたり、様々なアクティビティを行っている。観光を構成するこれら一つ一つの要素が、観光地の誘因材料である。

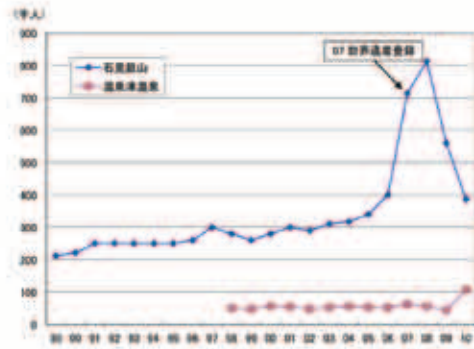
さらに、個々の遺産はそれぞれ固有の条件を有し、観光的な整備の段階も様々である。例えば、大観光地である京都や奈良においていくつかの社寺や遺跡が世界遺産となっても、それほど大きな影響は現れない。一方、小規模な受け入れのキャパシティしかもたず、それほど知名度の高くなかった地域が、世界遺産として全世界に名前をとどろかすことの影響は計り知れない。

このように「世界遺産」の登録を観光を通じて地域の社会的・経済的發展に結びつけるためには、遺産を含む周辺地域の「観光的条件」を見極め、その影響度合いを個々に判断していくことが必要である。また、遺産の性



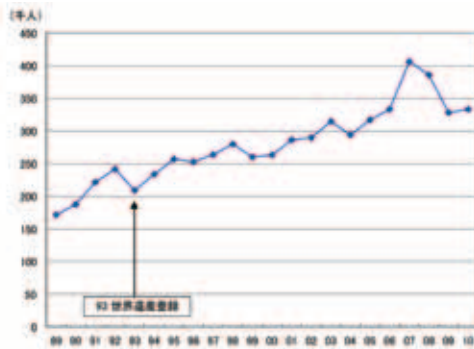
図5) 世界遺産登録地域の観光入り込み客数の推移

7. 石見銀山



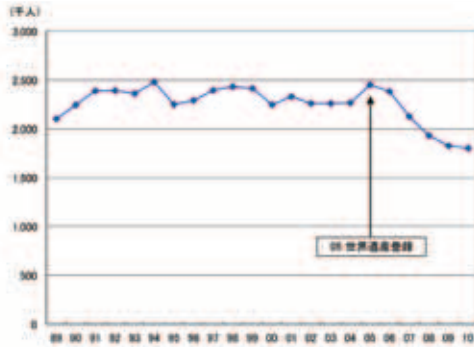
出典：島根県観光動態調査（島根県）

8. 屋久島



出典：種子屋久観光連絡協議会（鹿児島県）

9. 知床



\*斜里町・羅臼町の入込みの合計値  
出典：北海道観光入込客数調査報告書（北海道）

4. 白川村・五箇山



出典：白川村 資料／富山県観光客入込数推計（富山県）

5. 厳島神社



出典：広島県入込観光客の動向（広島県）

6. 日光市



出典：栃木県観光客入込数・宿泊数推定調査結果（栃木県）

格もそれぞれ異なる中、どのように観光的に活かしていくかを一連の観光行動の中に位置づけていくことが重要であると考ええる。

## 世界遺産が内包する矛盾と保護と観光活用とのバランス

「世界遺産」は世界中に広く知られるようになり、今や、ユネスコでもっとも成功した事業の一つと言われている。その認知度の高まりが、かえってそのブランド力を高めることとなり、本来の「世界遺産」の目的とはかけ離れて「看板」として一人歩きすることになってしまった。世界の中でも「優れた」「珍しい」もの——それは人々に魅力を感じさせ、訪れたいという欲求を沸き立てるものと受け止められる。ユネスコがわざわざそれをリスト化してくれているのであるから、そのことにも着目して世界遺産に群がる関係者が多いことも事実である。

保護のためには世界中に広く価値を知らしめたい、しかし有名になればなるほど管理者の意図しない行動をする人々が感心を持ち、遺産に危機を及ぼす可能性もある。世界遺産



上：中国・雲崗石窟（2001年登録）。石窟の周囲を大々的に開発、展示施設やホール、商業施設などを新たに設けるとともに、駐車場は離れたところに移設。区域内の移動は電気カート（有料）が徒歩 下：石見銀山世界遺産センター。400台の大規模駐車場とともに新設。大森地区を訪れる観光客は、ここで遺産に対する理解を深める

小笠原でのホエールウォッチングの自主ルール（父島に向かうおがさわら丸船内に掲示）



世界遺産のモニュメントの前での写真撮影（上：日光 山内への入り口、下：京都鹿苑寺（金閣））

は制度が設けられた時点で、大いなる矛盾を抱えていたのである。

観光と保護のバランスを取っていくために、現段階では遺産のサイトにおいて以下のような対策により観光客の行動がコントロールされている。

① できるだけ遺産の範囲から離れたところに駐車場等の施設を設置し、車両交通は遺産の

範囲から排除する。観光客には徒歩ないしは環境負荷の低い公共交通を利用して遺産に接近させる。

② 遺産の価値を観光客に伝えるインフォメーション機能を強化、インフォメーション施設やガイドシステムを充実させる。

③ 同時にサイト内に滞在する人数や時間の制限を設ける。

④ 利用にあたっての厳密なルールを設ける。

一見すると観光客には不便とも思われるこれらの対策は、未だ遺産への負担を軽減するという視点が強く、観光客の満足度を高めやすい観光行動に結びつけようとする観点が不足している感は否めない。

観光を遺産の保護に有効に活用するために、第一に魅力的な観光地として長らく存続しななければならない。そのことが地域の社会的・経済的な発展が「遺産が正しく保護されていること」によるもの」であるとの理解を深め、保

護の体制へと結びつく。これは、観光活用と保護のいずれかに偏った形では成立し得ない。

条約が成立して40周年となる2012年には、「世界遺産と持続可能な開発・地域社会の役割」をテーマとして世界各地で様々な記念イベントが開催されている。持続可能な開発の中で観光が果たす役割は大きい。地域住民の関与の重要性と同時に、観光行動に対する十分な理解と、多様な関係者との協力の元で体制を構築していくことが重要であると考える。

### 参考文献

- ユネスコ世界遺産センターHP <http://whc.unesco.org/>
- 河野靖 (1995)、「文化遺産の保存と国際協力」、風響社
- 宗田好史 (2006)、「世界遺産条約のめざすもの—ICOMOS (国際記念物遺産会議)の議論から—」、環境社会学研究 (12), pp. 5-22
- 稲葉信子 (2004)、「ユネスコ世界遺産条約が目指すもの—運営の実態と限界—」、国際交流102, pp.49-55

画家ラファエロの故郷として知られるイタリア中部のウルビーノは、世界文化遺産に登録された美しい小都市である。ところが、ルネサンス期が生み出した景観をめぐる論争が起こり、一時世界遺産登録取り消し騒動にまで発展した。その背景には何があったのか。

# イタリア・ウルビーノにおける 景観論争と文化遺産の 保全のあり方

文・写真 清野隆

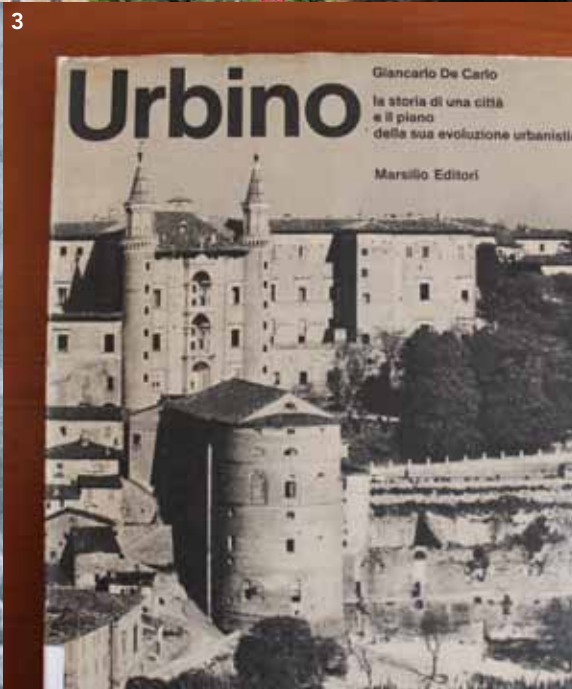


## 世界遺産の宝庫イタリア

イタリアは世界遺産の登録数が最も多い国であり、2012年現在、文化遺産43件と自然遺産3件がUNESCO（国際連合教育科学文化機関）によって登録されている。イタリアの全ての都市では旧市街地を歴史的地区として保護しているため、世界遺産に登録されている歴史的地区はごく一部に過ぎず、世界遺産の候補は無数に存在しているとも言える。

イタリアの歴史的地区の中を歩いて目の当たりにする風景は、都市の物語そのものと言ってもよい。古代ローマ時代に発生し、中世に原型を成した旧市街地Ⅱ歴史的地区は、いまなお、かつての佇まいを保ちながら、陽





1 ドゥカレ宮殿 2 ウルビーノの都市再生に携わったGiancarlo De Carlo (1919-2005) 3 1964年に作成された都市再生計画。Urbino la storia di una città e il piano della sua evoluzione urbanistica (ウルビーノ ある都市の物語と都市計画的発展に関する計画)

気な人々が生き活きと生活する舞台であり続けており、ゆつくりと時間をかけて形成された都市の中にはさまざまな時代の建築遺産が共存している。イタリア都市の面白さは、単に歴史的な建築遺産が現存するだけでなく、建築遺産が時代と共に少しずつ姿を変えながら、様々な役割を請け負ってきた様子がかがわれる点にある。文化遺産を各時代の人々の生活に活かそうとするこのような姿勢は現在にも受け継がれている。しかし、文化遺産を人々の生活に活かすことには多くの困難も伴う。ここでは、世界遺産に登録されているイタリア中部の小都市ウルビーノで起こった景観論争を通じて、生活者にとっての文化遺産の意味、そして世界遺産というシステムの課題について考えてみたい。

### ルネサンスの理想都市ウルビーノ

イタリア中部の小都市ウルビーノの名は日本ではあまり知られていないが、画家ラファエロを知る人は多いに違いない。ウルビーノはラファエロの故郷であり、モンテフェルトロ侯の統治下、ルネサンスが華開いた理想都市としてヨーロッパでは有名な場所である。中世以来のコンパクトにまとまったヒュー

マンスケールの街並みは今でも健在であり、ドゥカレ宮殿に代表されるルネサンス期の建築遺産が現存するウルビーノの歴史的地区は1998年に世界文化遺産に登録された。

ウルビーノは、イタリア国内では早い時期から都市再生に取り組み、歴史的地区の保護に着手した都市の一つである。第二次大戦後のウルビーノは経済的に貧しく疲弊した地方都市に過ぎなかった。元来、農業が盛んであったウルビーノは、戦後イタリアの「奇跡の経済成長」の中で取り残され、人々は生計を立てることもままならず、イタリア北部の大都市に人口が流出した。そして、人口の減少は歴史的地区を荒廃させ、貴重な文化遺産は存続の危機に曝されてしまった。このような状況に対して、ウルビーノ市は歴史的地区を保全するために、1960年代から都市再生に取り掛かった。この都市再生計画を主導したのが既に1950年代にウルビーノ大学校舎の改修設計を手掛けていた建築家ジャンカルロ・デカルロであった。デカルロは1950年代からその生涯を閉じた2005年までの半世紀に渡り、ウルビーノで都市設計と建築設計に取り組み続け、1989年にはその功績が認められ、ウルビーノ名誉市民の称号が

贈られている。

デカルロは、1964年にウルビーノの都市再生を目的とする計画を策定したが、その過程でウルビーノの都市形成史を探り、歴史的地区内のすべての建物を丹念に調査し、歴史的地区が再び市民が生活する場所となる戦略を示した。この中で彼は歴史的地区を保全するために、ウルビーノを大学都市と観光都市として再生させることを構想したのである。

まず、歴史的地区内の荒廃した状態で放置されていた修道院を大学校舎として蘇らせることで、大学の機能を強化し、より多くの学生の受け入れを可能にした。校舎内には市民も利用できる空間を配置し、大学校舎は歴史的地区内にさまざまなサービスを提供し、都市の居住性を向上させた。その一方で、学生寮を歴史的地区外に設置し、生活スタイルが大きく異なる一般市民と大学生の共存を図った。現在、ウルビーノ大学にはウルビーノ市の人口の2倍にあたる30000人の学生が登録している。

そして、観光客を招き入れるべく、バス・ターミナルの建設、歴史的地区の歩行者空間化など、都市交通の問題にも着手した。さらに、イタリア有数のリゾート地であるリミニ



1 ウルビーノ歴史地区の街路 2 ウルビーノ歴史地区の広場 3 歴史的地区は学生たちの憩いの場にもなっている 4 利用されなくなった修道院を改修したウルビーノ大学教育学部校舎 5 ウルビーノ大学経済学部校舎

とのアクセスを円滑にして、ヨーロッパ全土から訪れる観光客をウルビーノに呼び込もうとする壮大な構想も生み出された。残念ながら、この計画は現在のところ、実現していない。しかし、ウルビーノ歴史的地区を訪問する観光客は確実に増加した。現在、ルネサンス期の優れた文化遺産を目指してヨーロッパ全土からウルビーノにたくさん観光客が訪れるようになったのは、1960年代以降の都市再生の取り組みの賜物といえる。

このように、ウルビーノ歴史的地区では、再開発事業により、大都市と観光都市という新しい役割を請け負ったことで、停滞していた経済活動が再始動した。その結果、歴史的地区の居住性能は高まり、市民が生活する都市空間として新たな命が吹き込まれた。デカルロのきわめて明快な論理を持った戦略により、ウルビーノの歴史的地区は保全されたといえよう。1968年に制定されたウルビーノ再開発法により、財政的根拠を獲得し、1964年の計画で構想された再開発事業は次々に着手され、歴史的地区の保全と再開発は一段落した。1994年には新たな計画が策定され、ウルビーノでは歴史的地区の周囲に広がる田園地帯の景観保全にも取り組

み始めた。これらの総合的な保全計画の策定を経て、1998年12月にウルビーノ歴史的地区は世界遺産に登録された。世界遺産登録後、ヨーロッパ圏内からの観光客は増加している。近年、マルケ州政府観光局が日本語ホームページを開設し、その中でウルビーノが紹介されるようになり、日本人のウルビーノへの関心も高まっているようだ。

#### 景観論争の発端

今日、ウルビーノを訪れる人々は、メルカターレ広場に到着し、そこからドウカレレ宮殿を見上げて、ルネサンス期が生み出した建築遺産の豪華さと壮麗さに驚嘆するだろう。しかし、この景観をめぐる、1999年から2002年にかけて大きな論争が展開し、一時は、ウルビーノ歴史的地区の世界遺産登録取消し騒動にまで発展した。

問題の発端は、ドウカレレ宮殿の足元に位置し、メルカターレ広場に面して建つ旧厩舎の再利用計画であった。この厩舎はモンテフェルトロ侯がウルビーノを統治していた1490年にフランチェスコ・デイ・ジョルジョの設計により建設された。かつては、らせん状の斜路を通じてドウカレレ宮殿と接続されたドウ

カレレ宮殿と一体的な建築物であった。しかし、ルネサンス期の終焉以降、次第に厩舎は利用されなくなり、やがて放置され、屋根が崩落して廃墟となった。19世紀に入り、ウルビーノでルネサンス期以来の大規模な再開発が施されると、ドウカレレ宮殿の足元にガリバルディ通りが敷設され、その結果、ドウカレレ宮殿と旧厩舎は接続を絶たれ、それぞれが独立した建築物となつてしまった。さらに、この再開発の際、多くの住宅が取り壊され、そのガレキが旧厩舎の中に廃棄された。やがて、この場所には木々が鬱蒼と茂り、「豊かな菜園（Orto dell'Abbondanza）」と呼ばれるようになった。この厩舎の存在はルネサンス期に描かれた絵画が伝えるものの、市民の記憶からは消え去ってしまった。

前述のように、デカルロは、1964年の都市再生のための計画を策定する過程で、歴史的地区の都市形成史を徹底的に調査した。歴史的な史料、文献が紐解かれ、現存する建築物は限なく詳細に調べられた。その結果、市民の記憶から消え去ったらせん状の斜路と旧厩舎の2つの空間が発見されたのだ。ドウカレレ宮殿の足元に位置するこの2つの空間は都市再生のプランに組み入れられ、重要な



1 旧厩舎の内部。現在も施工の途中である。筆者が訪れた2011年9月には、ヴェネチアビエンナーレの会場として利用されていた 2 メルカターレ広場からみた旧厩舎 3 メルカターレ広場

再開発事業の対象となった。らせん状の斜路は1975年に修復されて元の姿を取り戻し、現在ではメルカターレ広場から歴史的地区にアクセスするゲートとなっている。一方、厩舎のあった空間は、再開発事業で屋根を架け直し、新たな施設として再利用されることとなった。財政難のため、長らく施工されずに放置されていたが、1998年3月に事業資金を獲得し、イタリア国内法に則り、文化財監督局による手続きを経て建築許可が下されたことで、その再利用計画が始まった。その後、同年12月にウルビーノ歴史的地区は世界遺産に登録された。

旧厩舎の再利用計画は、先述した建築家デカルロがウルビーノで最後に手掛けた再開発事業であった。再生後の旧厩舎は、ウルビーノの歴史が記録された史料や文献を収蔵する図書館、展示スペース、会議や講演会のための講堂、市民や学生が立ち寄るカフェなどを含み、メディアセンターとして再生される予定であった。デカルロは、このメディアセンターを「都市観測所」と呼び、ウルビーノに住む老若男女が集い、自らの生活について考え、ウルビーノとその歴史的地区が抱える都市問題に取り組み、解決するための施設とし

て構想していた。デカルロにとって、「都市観測所」は、近代社会の到来と実現を祝福する空間であり、近代的な建築技術によって実現されるべき空間であった。そのため、旧厩舎は、鉄とガラスといった近代的な材料と技術を駆使して設計された。ここで意図的に表現された近代性のうち、最も特徴的な箇所は新たに架けられた、波型に湾曲した屋根であった。この屋根の形状が後に景観論争と世界遺産の登録取り消し騒動の原因となったのである。

### 世界遺産登録抹消の危機

1999年、順調に進められてきた旧厩舎の再利用計画は施工の途上で暗礁に乗り上げた。先述の通り、旧厩舎はドウカール宮殿の足元にあり、一体的な景観を構成している。ドウカール宮殿の眺望はウルビーノ歴史的地区の重要な景観の一つであるため再利用計画が示す旧厩舎の波型の屋根はドウカール宮殿の眺望を破壊すると批判されたのである。

旧厩舎の再利用計画への批判は、まずイタリア国内の歴史家と美術史家から発せられ、イギリスの美術界が追随した。2000年には、イタリアの代表的な美術雑誌

Quadracolumnaが、旧厩舎の再利用計画を批判する特集を組んだ。さらに、旧厩舎の再利用計画を阻止しようと、イタリア国内の環境保護NGOがUNESCOに対してウルビーノ歴史的地区を世界遺産登録リストから取消すよう訴えた。これに対して、設計者であるデカルロ、ウルビーノ市長は設計案通りの施工が妥当であると主張し、大半のウルビーノ市民がその主張に賛同した。それは過去の建築遺産を尊重しつつ、新しい建築文化を育ててきたウルビーノの歴史を重視したいという願望によるものであった。彼らはデカルロが提示した近代的な建築文化による旧厩舎の再生を支持し、21世紀のウルビーノの景観を歓迎したのだ。

両者の意見は真つ向から対立し、議論の結果は第三者に委ねられた。UNESCOの外郭組織であるICOMOS(国際記念物遺跡会議)は事態を重く受け止めて、専門委員会を立ち上げた。同委員会は施工段階にあった旧厩舎を調査し、旧厩舎の設計案はドウカール宮殿の眺望を乱すとの判断を下した。この結果を受けて、記念物の修復工事についての最終決定権を有する文化財監督局は、ウルビーノ市に屋根の形状の設計変更を要請した。

## 世界遺産制度をめぐる今日の課題

論争から約10年が経過した現在、旧既舎はなお施工の途上にある。屋根は当初設計案から真つ直ぐに傾斜した形状に変更されて架けられた。一方、その内部空間は当初設計案の通りに施工された。論争から導き出された結論は、表面的で部分的な問題への解決策となってしまった。つまり、世界遺産登録の是非をかけた文化遺産の保全のあり方をめぐる論争は、単なる屋根の形状をめぐる問題に矮小化されてしまったのだ。この論争は世界遺産の未来に関する重要な議論であったと筆者は捉えている。問われるべきは、世界遺産は時間の経過と共に変化する人々の日々の営みに対してどのような貢献をもたらすのか、という世界遺産制度の存在意義である。

当初設計案は、文化財監督庁と確認の上

で作成されている。さらに事業費用は公的な審査を経た助成を受けており、お墨付きのプロジェクトであった。批判を受けた設計案は、文化遺産の修復における基本的な原則に基づき、旧既舎の現存部分は丁寧に修復されている。また、内部空間に開口部と、パティオが設けられ、建物と都市の歴史が刻まれた現存部分は、新たに追加された構造体とは明確に区別されて公開されている。このような文化遺産の修復方法は、国際的な統一見解にも沿っている。しかし、そうであってもなお、文化遺産の保全方法についてはさまざまな問題が発生する。当初設計案では、波型の形状の屋根にはウルビーノで伝統的な材料であるテラコッタが使用され、地域の歴史と伝統に配慮されていた。ここには文化遺産を保全するだけでなく、地域の歴史や伝統を現代的な文脈で継承しようとする試みがみられるが、こう

いった試み自体が、今回の論争では否定的に捉えられてしまったと推測される。世界遺産条約では、文化遺産の周辺環境への保護措置が義務付けられている。なるほど、文化遺産には、それにふさわしい環境が必要だ。しかし、絵画に残されたルネサンス期の風景をそっくりそのまま凍結的に保全することが世界遺産というシステムの最大の目標になるのだろうか。世界遺産とは、人類の財産であり、私たちに豊かな未来をもたらしてくれるものであるはずだ。だが、世界遺産を単なる美術品や芸術品として取り扱うならば、その限りではない。文化の多様性を尊重する立場から文化遺産の保全を主張する世界遺産というシステムを、真に文化の多様性の育む源泉とするためには、まだまだ多くの議論が必要である。



世界遺産登録が記されたプレート（1998年登録）



ルアンパバン（ラオス）。1995年に世界文化遺産に登録



ハロン湾（ベトナム）。1994年に世界自然遺産に登録 ©Nguyen Thi Hong Hai



## 座談会

# 世界遺産の

# インパクトを

# どう考えるか

本学観光学部および大学院観光学研究科には、海外からの留学生が多数在籍している。ベトナム、ラオス、スリランカ出身の3人の観光学研究科の大学院生がそれぞれ研究の対象としている自国の世界遺産の現状や登録後に見られる地域の変化、課題などについて、観光学の視点から語ってもらった。

**ファムホンロン**

（ベトナム出身、観光学研究科博士課程後期課程在籍）

**センサテジットシモンケオ**

（ラオス出身、観光学研究科博士課程後期課程在籍）

**ラナワカチャットワシカ**

（スリランカ出身、観光学研究科博士課程後期課程在籍）

**市川哲** 司会・翻訳

（観光学部助教）

構成・撮影 大橋健一（観光学部）

司会…世界各地のユネスコによって指定されている世界遺産は、今日の観光を考える場合に重要な意味を持つものとなっています。その指定やそれに伴う観光化は、各地域やそれぞれの遺産に大きな影響を与えています。本日は、世界遺産と観光の関係をさまざまな角度から研究している皆さんに集まっていただき、各地の状況を紹介していただくとともに世界遺産と観光をめぐる課題について語っていただきたいと思っています。それではまず各参加者に自己紹介を含めて、ご自身の研究している地域と世界遺産の概要を紹介していただきたいと思っています。

**ファムホンロン**（以下、**ロン**）…私はベトナムのハロン湾を調査地としています。ハロン湾は私の生まれ故郷でもあります。私は社会交換理論の視点からハロン湾の観光と地域住民の関係について研究しています。私はハノイにあるベトナム国家大学を卒業しました。2004年からマレーシアの大学に留学して修士号を取得し、08年に日本に来ました。**センサテジットシモンケオ**（以下、**シモン**





ゴール（スリランカ）。1988年に世界文化遺産に登録 ©松岡宏大

ケオ）…日本に来る前にはラオス国立大学で教鞭をとっていました。私はベトナムで学士号を、日本で修士号を取得しました。私の調査地はラオスのルアンパバンです。私は首都のビエンチャン出身ですが、ルアンパバンが世界遺産として登録されたことに誇りを持ち、04年から現在に至るまでルアンパバンについての研究を続けてきました。

ラナワカチャトウシカ（以下、チャト）…私はスリランカ出身です。以前はスリランカで日本人観光客を対象にした旅行会社で働いていましたが、07年に日本に留学しました。08年からスリランカの世界遺産であるゴール旧市街を調査地としています。世界遺産指定によってゴール旧市街は国際的に有名な観光地となりました。

#### 数多くの島と奇岩で知られるハロン湾

司会…皆さんの調査地の世界遺産はどのような特徴があるのでしょうか。

ロン・ハロン湾はベトナムの北東部にあります。1994年に世界自然遺産に登録されました。

ハロン湾の特徴は島と奇岩が数多くあることです。ハロン湾は世界自然遺産ですが、文からの観光客が多いです。

ラオス人は旧暦の新年にルアンパバンを訪ねます。ラオスでは、ルアンパバンは聖なる仏教の都という性格があります。ルアンパバンはかつてカンボジアに占領された際に仏教が伝えられました。そのためラオスの新年には国内の観光客が多数を占めます。一方、雨季にはルアンパバンを訪問する観光客は多くありません。この時期にラオスを旅行するのは不便だからです。雨季は4、5月から9、10月まで続きます。雨季はラオスの観光にとって障害の一つとなっています。

化的かつ歴史的な魅力もあります。この地を訪問する観光客は、国内のベトナム人だけでなく、外国人も多くいます。外国人観光客で最も多いのは中国からの人々です。地理的に近いのが理由です。また歴史的な背景から、フランス人やアメリカ人も多いです。首都ハノイに近い場所にあることも観光客の来訪に寄与しています。

#### 聖なる仏教の都、ルアンパバン

シモンケオ…ルアンパバンはラオス北部にある小さな都市です。人口は約7万6000人ですが、年間約40万人の外国人観光客がルアンパバンを訪問しています。

ルアンパバンが有名な観光地であるのには

いくつかの理由があります。ルアンパバンは宗教的な場所です。フランス植民地期の建築物とラオスの伝統的な建築物がともにあります。ルアンパバンの景観の特徴は、メコン川とカン川という二つの川の合流点であること、その都市計画やプーシー山などの自然環境にあります。さらに、ルアンパバンには「生きている文化遺産」があります。ルアンパバンには「生きている文化遺産」があります。ルアンパバンの住民は毎朝、托鉢する僧侶にお布施をしており、これは現在に至る、「生きている遺産」と言えると思います。

ルアンパバンが世界文化遺産に登録された1995年以降、タイや中国、ベトナム、アメリカ合衆国、イギリスといった多くの国々から観光客が訪問しています。特にイギリス



フムホンロンさん



センサイト シモンケオさん



ラナワカチャトウシカさん



市川哲助教



観光客は寺院や僧侶の托鉢には興味を持つが、それ以外の宗教的なことに関心を示すわけではない(ルアンパバン)

の人口の半分がムスリムであり、ゴールは歴史的にムスリムがマジョリティだった」と説明されたことを覚えていきます。

### 世界遺産に登録される前後の変化

司会：世界遺産に登録される前と後では各地にどんな変化が起きているのでしょうか。

ロン：世界自然遺産に登録される以前からハロン湾は広く知られていましたが、海外からの観光客はそれほど多くありませんでした。ハロン湾周辺には宿泊施設がありましたが、高級ホテルは少なかったです。当時観光客が少ないぶん、ハロン湾の水はきれいでした。しかし、現在では多くの観光客が遊覧船に乗って観光するため、ハロン湾はそれほどきれいとはいえなくなりました。

道路や港湾などのインフラは、世界自然遺産の登録後、整備されてきています。しかし、私の考えでは、世界自然遺産登録は自然環境に明らかにネガティブなインパクトを与えています。マングローブ林や海底の海藻に対する悪影響があります。観光客向けの遊覧船がそれらに悪影響を与えるのです。石灰岩の洞窟も広げられてしまうという状況もあります。遊覧船が通り抜けるようにするためです。

### 多民族・多宗教の都市、ゴール

チャト：ゴール旧市街地はスリランカ南部、コロomboの南約120 kmに位置します。ゴールは新市街と旧市街から構成されます。2001年のセンサスによると、ゴール旧市街の住民約2380人のうち、約50%がムスリム、約45%がシンハラ、約5%がタミルで、ゴールは多民族・多宗教の都市といえます。スリランカはシンハラ人と仏教徒が多数派を占める国家ですが、ゴールはスリランカの他の地域と比較してイスラム教徒であるムスリムが多いという特徴があります。スリランカの他の地域ではシンハラ人は多数派を占めますが、ゴールではムスリムが多く、タミル人も居住するという特徴があります。

ゴール旧市街を訪問すると、建築に特徴があることがわかります。現在、スリランカには6つの世界文化遺産とふたつの世界自然遺産があります。ゴールは文化遺産です。その他のスリランカの世界文化遺産は仏教に関係するものですが、ゴールはその点で異なります。ゴールは1988年にユネスコによって世界文化遺産に登録されましたが、69年にはすでに国連によって建造物を保護すべき地域

私はまだこのような自然環境に対するインパクトに関する具体的な調査を行っていません。現在調査しているのは、ハロン湾の住民の観光に対する態度や認識についてです。ハロン湾の住民の観光に対する認識は良好ですが、自然環境問題に対しては非常に悪い印象を持っています。特にハロン湾の水質に悪影響を及ぼしていることは地元でも強く認識されています。

シモンケオ：ルアンパバンでも、そのような問題は様々な領域で起きています。しかし、それを最小限に食い止める努力もなされています。世界文化遺産に登録された95年はラオスの観光にとって記念すべき年でした。それ以前はルアンパバンにはそれほど多くの観光客は来ませんでした。ルアンパバンに観光に来るのは不便で、道路も良くなり、人々はしばしば車ではなく歩いて移動しなければなりませんでした。飛行機も安全とはいえませんでした。

しかし、95年以降、ルアンパバンは急速に開発され、多くの人々が訪ねるようになりました。市街地のインフラは改善され、ホテルや宿泊施設は増加し、多くの観光客を受け入れることが可能になりました。

として選択されました。

ゴールはスリランカの他の地域と比較すると、国際観光客がしばしば訪れる地域です。統計によると、観光客の割合は外国人が約50%、スリランカの国内客が約50%です。あるイギリスの研究者は、「ゴールを訪問する観光客の半分はスリランカ国内客だが、ゴールに宿泊して滞在するのは外国人であり、国内客ではない」と報告しています。その理由として、国内客にとってゴールに滞在するのはかなり高額な費用がかかるためです。ただし、海外からゴールを訪問するスリランカ人観光客はゴール旧市街に宿泊する傾向があります。

スリランカではスクール・トリップといって、学校の生徒がゴールの歴史を理解するために訪問することがよくあります。ゴール旧市街の要塞は、最初はポルトガル人によって建設され、その後17世紀になるとオランダ人、次いでイギリス人によって占領されました。このような歴史を学ぶために生徒たちはスクール・トリップをします。スクール・トリップは日本の修学旅行のような活動です。私も学生のときにスクール・トリップでゴールに行つたことがあります。そのとき先生は「ゴール

経済的な分野では観光収入が増加しました。首都のビエンチャンよりもインフレが加速しているほどです。95年以降、市街地における建設業も活況を呈し、建設ブームは2005年から07年ぐらいいままで続きました。

ユネスコは現地のインフラの状況を監視しています。ただし、環境やごみ処理、水質管理などはまだ充分とはいえません。特にごみ焼却に関しては、ルアンパバンはまだ十分な処理の手法を確立しておらず、焼却によって生じる煙が大気汚染を引き起こしています。また、ルアンパバンにやってくる観光客は、寺院や僧侶の托鉢には興味を持ちますが、それ以外の宗教的なことにあまり関心を示すわけではないので、文化的な面でも問題が起きています。観光によってルアンパバンの住民たちは裕福になりましたが、依然として多くの問題が存在しています。

### ポジティブとネガティブの両面

チャト：ゴールでは1988年に世界文化遺産に登録されて以降、外国からの観光客が増えたことは確かです。私が現地ではアリングした限りでは、登録以前は外国人の姿はほとんど見られなかったようです。スリランカで

は83年から長い内戦が続いていました。内戦中でも何回か平和な時期があり、観光客が来たこともありましたが、大きく状況が変わったのは2009年の内戦終結からで、観光客はこれまでにないほど増加しています。

ほとんどの外国の観光客はゴールの新市街ではなく、旧市街に興味を持っています。このため、旧市街には多くの変化が生まれませんでした。観光客の増加は地元の住民に収入をもたらしました。ハイシーズンにはほとんどのホテルは満室で、観光客は空き部屋を見つけることができませぬ。部屋代も高騰します。こうして地元の住民は大きな利益を得ることができたのです。

NGOの活動も始まりました。ゴールでは伝統工芸品のレースが有名で、多くの女性たちは自分の家でレースを編み、販売しています。レースを編む女性の姿を見学するために来る観光客もいます。あるNGOは彼女たちを支援するための活動をしています。

04年にスリランカ政府が設立したゴール・フオート遺産基金も地元へ貢献しています。地元の住民が旧市街のインフラを改善したい場合、この基金を活用できます。これらは、世界遺産登録後に起きたポジティブなインパ

2010年にスタートした「ゴール旧市街の道路開発計画」では、道路に黒いレンガが使われたため、地元住民から「もとの道路とは違う」との声も聞かれた。



クトといえます。

一方、ネガティブなインパクトもあることは事実です。ゴールでは処理施設やごみ箱の設置が不十分だったため、ごみ問題が生じました。下水道の処理も悪化しました。

地元の住民は、観光客を乗せるバスの旧市街の乗り入れを制限するべきだと言っています。旧市街には3つの学校があり、スクールバスもあります。地元のバス以外に観光客を乗せた大量のバスが入ってくるので、大気汚染や騒音被害が発生しています。旧市街には公共のトイレが少なく、旅行者は民家にトイレを借りなければなりません。それは簡単なことではありません。最近ようやく、旧市街には公衆トイレが作られるようになりました。

内戦終結後に起きたいちばん大きな変化は、外国人による旧市街への投資です。特にカフェを始める外国人が増えました。ブティック・ホテルやゲストハウスを営業する外国人もいます。これらは旧市街の観光エリアのどこでも見ることが出来ます。

また、2004年にスリランカの土地法が変更されたため、旧市街の土地を購入する外国人が増えています。こうしたことから地元の中に「ゴー

はこのような問題をどのようにして解決するかを知っていますが、ベトナムではまだ十分理解しているとはいえません。世界遺産登録によってハロン湾はポジティブなインパクトを受ける一方で、大きな問題を抱えています。

### 観光地住民の認識を調査する

司会…ところで、皆さんが世界遺産観光地を研究対象にしたのはどのような理由があったのですか。どのような研究をしているのかも教えてください。

ロン…第一の理由はハロン湾が私の故郷であり、18歳になるまで両親と暮らした家があるからです。ハロン湾で調査をすることで、私は自分の故郷に貢献したいのです。ふたつ目の理由は、ベトナムではすでに多くの観光に関する調査が行われていますが、観光地の住民の意識に関する調査はほとんどないからです。地元の人々は観光客を迎え入れるうえで重要な役割を果たします。このような地元の人々の観光開発に対する認識を知る必要があります。そのため、私は政府関係者だけでなく、多くの地元住民に対するインタビューを行いました。観光業に従事している人々や炭鉱で働いている労働者、地元の教師なども

ル旧市街はもはや外国人の土地だ」と不満を言う人がいます。ゴールがヨーロッパ人によって統治された長い期間、この地に居住していたほとんどの人々がヨーロッパ人だったことは事実ですが、地元の住民はそれを快くは思っていない。彼らはこれほど多くの部外者が住み着くことを望んでいないのです。

04年に起きたスマトラ沖地震によってゴール旧市街は津波の被害を受け、スリランカ政府はゴール旧市街復興のための資金援助をしました。いくつかの復興プロジェクトがありました。そのうちのひとつは海洋博物館の建設です。他にも08年には60軒の老朽化した家屋の再建計画、10年には道路開発計画がスタートし、12年に完成しました。この道路開発計画は旧市街の環境を大きく変えました。このとき道路に黒いレンガが使用されたため、私が現地でヒアリングした際には、地元の住民から「現在の道路はもとの道路とは違うものだ」との声も聞かれました。こうしたことが、ゴール旧市街が世界遺産として登録されて以降に起きた変化です。

ロン…ハロン湾でもいろいろな問題が生じています。特にいかにして環境問題を管理するかという問題に直面しています。西洋諸国で

対象とし、彼らの観光に対する認識について調査しました。

シモンケオ…私は、世界遺産として登録されたことによる観光へのインパクトと、ルアンパバンをいかにしてプロモートすべきかについて、深く知りたいと思ひ、研究を始めました。私はルアンパバンの遺産としてのコンテクストを知っています。その基盤は仏教にあると考えています。

確かに、ポジティブな変化もネガティブな変化も両面あります。それでも、ロンさんが話していたように、私の研究もルアンパバンに貢献するはずですよ。

私はルアンパバンのゲストハウスに滞在し、宿泊客を中心にインタビュー調査を行いました。その結果、わかったのは、かつては宿泊客が外国人であるうがなかるうが、ルアンパバンのゲストハウスは過ごしやすかったのに、現在は少し状況が違ってきていることです。ルアンパバンの人々は明らかに金銭志向になっています。

## 観光とジェンダーの関係

チャト…私が調査地としてゴール旧市街を選んだのは、そこが世界遺産だからではありません。スリランカで最も多くの外国人観光客が訪れる場所だからです。

私は最初、観光が異なる民族集団に与える影響を調査していました。その後、ジェンダーと観光の関係に関心が移り、いかに観光がジェンダーや女性のエンパワーメントに影響を与えるのかを調査しました。ゴール住民の多数派はムスリムですが、ムスリム女性はもともと家庭外で労働することはありませんでした。しかし、観光化によってムスリム女性でゲストハウスのオーナーになるような人も現れています。観光がジェンダーに影響を与えているといえます。

ゴールの地元の人々に世界遺産登録についての認識を尋ねてみると、ほとんどの人は「登録前は、ゴールを特に誇りに思っていないかった」と言います。登録後は「大変誇りに思うようになった」という人が増えました。が、60代の人々はそれほど誇りに思っていないようでした。彼らは世界遺産についての知識がなかったからです。しかし、2004

はブラスになりますが、環境や文化に関する地域のバランスが崩れることについては考慮しなければなりません。地元の人々や政府だけでなく、ゴール・フォート遺産基金のような第三者機関が問題をコントロールし、ネガティブな現象を最小化できるのではないかと考えています。観光は世界遺産にとってより良い方向性を与えることができるはずですが、シモンケオ…我々研究者が研究資金を得ることで調査ができるように、世界遺産も資金を得ることができれば、もっとよく管理されるでしょうし、政府も助力を得ることができます。しかし、多くの場合、現地の人々はただユネスコの規定を受け入れ、それに従うだけです。ルアンパパンの地方政府は、実際には世界遺産をうまく管理しているとはいえません。残念ながら、多くのラオスの人々は単にビジネスを保持することを望んでいます。しかし、そのままでは環境は悪化します。観光客を受け入れるより良い管理の方法を学ぶ必要があります。

ロン…実際の観光の実践と観光研究にはギャップがあります。世界遺産を対象とした観光には、以前から良い側面と悪い側面がありました。私にとって重要なのは、いかに世

年に設立されたゴール・フォート遺産基金が開いた地元の人々を対象としたミーティングによって、いかに地元の人々が世界遺産と観光に関わればよいのかを伝えることができたことから、それ以後、多くの人々がゴールに誇りを持つようになりました。

それでも土地価格の高騰のため、旧市街の外に出て行く人々も増えていきます。旧市街に住む多くのムスリムは、ひとつの家屋に大家族で居住していましたが、外国人に家屋を売れば、旧市街の外に新しい大きな家屋を購入することができると、そうやって旧市街から出て行くのです。

ゴール旧市街に関する先行研究では歴史学や考古学による成果が多くありますが、観光が社会に与える影響やジェンダーに関する研究はまだありません。私の研究は政府や地元の人々にゴールが世界遺産に登録されたことの意味を改めて考え直してもらおうための手助けになるのではないかと考えています。

### 観光のインパクトをいかに管理するか

司会…最後に、観光学の視点から世界遺産を考えることの意味について皆さんの考えを聞かせてください。

界遺産を対象とした観光の良い側面を維持し、同時に世界遺産に対するネガティブなインパクトを管理するかです。

観光のインパクトの大きさを見るたびに、観光にとつてのマーケティングの重要性を感じます。ある地域が世界遺産として登録されると、その地域の名前はそれだけで有名になるので、PRする必要はありません。これも実は観光のインパクトに関する問題です。もしチャンスがあれば、今後はマーケティングの手法に注目した調査を行いたいと思っています。

司会…皆さんのお話から世界遺産観光地の実情のいろいろな側面を知ることができました。観光のインパクトをいかに管理するかという課題は、世界遺産観光地に限った問題ではありませんが、世界遺産であるがゆえそのインパクトが大きな意味を持つということなどだと思います。皆さんの研究がその課題の解明や解決に結びつくことを期待しています。本日はありがとうございました。

(2012年6月6日 立教大学新座キャンパスにて)

シモンケオ…観光研究には様々な領域があります。私は文化の領域に関心があります。なかでも宗教を重視しています。ラオスでは仏教が生活の中心にあるからです。

ルアンパパンの生活は、日本とはずいぶん異なっています。文化の異なる訪問者としての観光客はルアンパパンを訪れることで、地の文化を知ることができます。一方、現地にも文化変容が生じます。外国人観光客はお金やいろいろな知識を持っているため、地元の人々も外国人観光客に大きな関心を持ちますが、同時に社会問題も生じています。たとえば、タイにおける売春といった社会問題はルアンパパンでは起きていませんが、文化に関する問題は生じています。観光によって地元の人々の文化や社会の認識の仕方が変化しています。世界文化遺産の観光地の研究から観光の文化的インパクトについてのさまざまな問題が見えてきます。

チャト…世界遺産に登録されたことで多くの地域でいろいろな問題が発生しています。世界遺産になるのは観光の観点からは良いことだと思いますが、皆さんの話や文献研究を通じてネガティブな問題が多く生じていることはわかっています。政府にとつて経済的に



## Schedule

2012/3/6	成田発
3/7	ブルネイ到着。歓迎会と ホストファミリーの出迎え
3/8	ホストファミリーと終日行動
3/9	ブルネイ、日本学生交流 会 (UBD 学生会、ホスト ファミリー、BJFA、大使 館関係者ら出席)
3/10	テンブロン国立公園ツアー
3/11	ホストファミリーと終日行動
3/12	ホストファミリーと終日行動
3/13	帰国



ブルネイの正式名称は「ブルネイ・ダルサラーム国 (Brunei Darussalam)」。

首都はバンダルスリブガワンで、イスラム教を国教とする。今回は格安航空エアアジアを利用し、クアラ Lumpur を経由した。長時間に及ぶフライトで着いた先のブルネイはとにかく暑かった。

例年通り、一家庭に日本人学生が2、3人ずつ1週間ホームステイをさせていた。初めの3日間はホストファミリーと一緒に過ごした。

私のステイ先では、初日にブルネイ対ミヤンマーのサッカー国際試合の観戦に行った。黄色いユニホームに着替え、途中雷雨でびしょびしょになったが、知らないブルネイ人と一緒に声援をあげての観戦は新鮮だった。2日目には市場や川、ジャングル、海

にも連れて行ってもらった。夜には民族衣装を着てもらい、ホームパーティーに出かけた。男性が一つの部屋に集まり、コーランを読みながらお祈りが始まった。その後は沢山の料理をみんなで食べながら談笑した。

3日目には七ツ星といわれるエンパイヤホテルを見学。4日目はゼミ生全員で恒例のテンブロン国立公園ツアーへ。カヌーに乗り、目的の地まで猛スピードで川を渡る。その後雨林に入り、急斜面をロープ伝いで山頂へ。無事に登り終えた後は、野生のドクターフィッシュがいるという滝壺へ。膝上まで水に浸かり、全身ずぶ濡れになりながらの「ジャングルツアー」は、日本では体験することのできないものだった。5日目は各家庭のホストファミリー、現地の大学生とビーチでバーベキュー。予定にはない企画であったが、最高

に楽しい一日となった。その他にも、モスク見学などいろいろな場所を訪ねた。

ブルネイの代表的料理でサグーというお餅のような料理がある。日本の割り箸に似た箸（割らずに使うのだが）でくるくると巻きつけて食べる。味はソースをつけないとほとんど無いが、かなりお腹にたまる。イスラム圏なので、中華系の家庭以外はお酒や豚肉はタブーであり、食品を買う際には必ずハラールマークがついているものを選ばなければならない。ほとんどの料理はさっぱりしていて美味しく、日本人好みだと思う。

今回のホームステイで私が感じたのは、ブルネイの自然の豊かさや経済的な豊かさ、そして治安の良さであった。現地で感じた「誰もがみな友達」という感覚もこれらによるものかもしれない。(江原由莉)

# ブルネイ、マレーシアとの相互交流ホームステイ

舛谷研究室 (観光学部交流文化学科)

舛谷研究室では、これまで海外の学生との相互交流ホームステイを企画実施してきた。ゼミ生の海外ホームステイを「アウトバウンド」、海外の学生の来日を「インバウンド」と呼んでいる。以下、ゼミの活動を報告する。





## Schedule

- 2012/6/24 マラヤ大学生 羽田着
- 6/25 マレーシア大使館訪問。  
立教大学池袋キャンパス  
見学。ウェルカムパーティー  
(マレーシアレストラン)
- 6/26 立教大学新座キャンパス  
見学。合同ゼミ
- 6/27 立教大学新座キャンパス。  
特別講義
- 6/28 ゼミ生企画インパウンドツ  
アー(上野、浅草、皇居他)  
ガイド
- 6/29 新座市ボランティアツアー
- 6/30 ゼミ生宅ホームステイ。  
チャペルコンサート
- 7/1 ゼミ生宅ホームステイ
- 7/2 横浜スタジアムツアー
- 7/3 地方見学
- 7/4 地方見学
- 7/5 地方見学
- 7/6 修了式
- 7/7 帰国



神を大切にしているが、ホストとして相手を受  
へ赴く際は、「郷に入っては郷に従え」の精  
ないことがある。ゲストとして自分が海外  
マレー人はイスラム教徒であるため宗教  
上、特に食事の面で気を付けなければなら  
てなしをする楽しさや難しさを経験した。  
週間共に過ごす中で、「ホスト」としておも  
原宿・秋葉原・浅草のインパウンドツアー、  
1泊2日のホームステイなど、彼らと約1  
歓迎会から始まり、キャンパスツアー、  
一家庭で彼らを受け入れ、ゼミ生企画のイ  
ンパウンドツアーも行っている。

け入れる場合、相手の好みや宗教などを尊  
重しながら日本を楽しんでもらうことが大  
切だ。限られた時間の中で、彼らが楽しん  
でもらえる場所・モノ・ことは何かを考え  
ながら、おもてなしをするコトは難しいが、  
同時に私たち自身も日本の良いところを再  
発見できる機会になっている。

1泊2日のホームステイでは、それぞれ  
のホストがマラヤ大生と一緒に自分の所属  
するサークルの活動に参加したり、地元の  
公園を散歩する。観光名所を案内するだけ  
でなく、私たち日本の学生のごく普通の生  
活を体験することが彼らにとって新鮮であ  
り、意外にも私たちの日々の暮らしが彼ら  
を惹きつけるものであることに気付く。

今回は毎年の反省点でもある事前の準備  
不足を解消するために、「POBLOGON」を利用  
して予め彼らの要望などを聞いておくこと  
で、短い時間をより充実させる工夫をした。  
別際に「楽しかった、また日本に来たい」  
と言ってくれた彼らの笑顔のために、ゼミ  
生同士で協力しあい、今後も受け入れの準  
備を進めたいと思っている。そして、新し  
い出会いや発見を心待ちにしている。(柄  
沢陽子)



その1

## トラベルライティング

トラベルライティングとは、日本のトラベルライターが発掘を目的とするプロジェクトです。メンバーは、「トラベルライティングアワード」の運営と、フィールドワークの実施を中心に活動しています。

「トラベルライティングアワード」では、航空機内誌や鉄道車内誌などを取り寄せ、掲載されているトラベルライティングを講読します。数々のトラベルライティングの中から、サブゼミ生が「私たち観光学部学生が興味深く読める」「読んでみて新鮮な発見がある」「読んだ後、そこに行つてみたいと思える」「写真が効果的に使われている」という4つの選考基準で候補作品を選出します。

その後、全ゼミ生に講読、投票してもらい、当年度の「トラベルライティングアワード」受賞作品を決定します。アワードに輝いた作品の著者には、毎年トロフィーと賞状の授与を行っています。

JTB旅の図書館への訪問も恒例の活動です。この図書館は日本各地や世界各国のガイドブック、地図、紀行文など2万5千冊以上を所蔵する旅専門の図書館で、航空会社の機内誌や各地のパンフレットもあります。多くの旅にまつわる書物にふれ、トラベルライティングについての知識を深める機会となっています。他にも、ANA機体工場見学や日本橋高島屋でのフィールドワークを自主的に企画し、講読だけではなく、様々な場所に足を運ぶことも大切に行っています。(水本理恵)



旅の図書館訪問(トラベルライティング)

## 声をかけるきっかけを模索して 舩谷鋭(交流文化学科)

高等教育機関における学びとは何だろうか? ああでもない、こうでもないと思いを巡らし、結局決めかねる経験をする事ではないか。

頃合いを見計らってゼミ生に声をかける。話をしてみる。一番効果的なのは考え込んでいるタイミングだ。ではどうしたら思い悩んでもらえるか? 手に余る経験をしているときではないか。そうした思いから、舩谷ゼミでは様々な場を用意している。ゼミ開始の2年次から卒論につながるテーマを持ち寄り、プレゼン合宿で丸一日議論する。海外ゼミ合宿を企画運営してもらい、異文化体験をし、事前事後学習を行う。学年問わず、先輩後輩がゼミ時間外のランチミーティングでプロジェクト毎に集まってサブゼミ活動をする。今回ゼミ生に紹介してもらった「ホームステイ」、「トラベルライティング」、「ICT」の他、ロングトレイルを含むまち歩きを行う「観光まちづくり」、アニメ聖地巡礼など

その2

## ICT

ICTとは「Information and Communication Technology」の頭文字で、情報通信技術を意味しています。このプロジェクトは、インターネットやコンピュータに触れる機会を増やし、文化としてのICT知識や技術を学ぶ場です。それらの技術を使って観光対象を外へ広報していく活動をしたり、実際にサーバーなどの機器に触れてICT技術の知識を実習したりする場となっています。

このプロジェクトは、秋葉原でのフィールドワーク時に個人用の端末を購入し、それを中心にICT技術に触れてみることから始まります。具体的には「Windowsを端末にインストールしたり、ゼミのホームページを利用して自己紹介ページを作ったりなどの課題を通し、メンバーの知識を増やしていきます。また、ITパスポートという情報処理の国家資格取得を必須としており、学内のe-learningを利用し、ICTの基礎を学んだ上で資格取得に向けた本格的な学習へ入っていきます。これによってメンバーが観光学部生ながら就職活動においてIT業界を目指す一因となり、就職活動における視野を広げる事にも貢献しているといえます。今後はスマホ専用アプリ開発のためにプログラミング学習を活動に取り入れ、さらにサーバーの管理・運用について一から学び、ゼミのサーバーをより豊かにできるように学習していく予定です。(関口諒佐)



秋葉原フィールドワークにて (ICT)

コンテンツツーリズムを検証する「メディア・ツーリズム」、ダイクツーリズムを主な対象とする「日本とアジア」、ホテルサービスや世界遺産など価値基準を扱う「グローバルスタンダード」などのプロジェクトが継続的に運営されている。既存の枠に捕われず、三人集まれば自主企画として実施することも妨げない。そうした中から山手線徒歩一周や富士登山、屋久島エコツアールなどの定例企画も生まれた。JATAA旅博2012の「海外卒業旅行企画コンテスト」優秀賞もゼミ有志の試みだった。

観光を素材に、まず自分が体験し、楽しんでみる。そして考えたり、まとめたりする。こうした体験の塊が舩谷ゼミである。担当者の専門である東南アジアという地域や、言語文化や華僑華人という対象に限らず、学生の興味関心につきあって右往左往するのは楽ではないが、私は学生をじっと見つめ、声をかけるきっかけを探している。

## 読書案内

今回の読書案内は、「世界遺産」の最新の実情を紹介する入門的な2冊



## 世界遺産学への招待

安江則子 編著(二〇一一)  
法律文化社(二二〇〇円 税込)

**世**界遺産とは何か。多くの読者は具体的な世界遺産の名前を挙げることでできるだろう。しかし、世界遺産の保護とは何か、と問われた

らどうだろう。誰が世界遺産を保護しているのか。保護に際して問題はないのか。問題があるとしたら、それはどのようなものか。本書は、このような世界遺産の保護

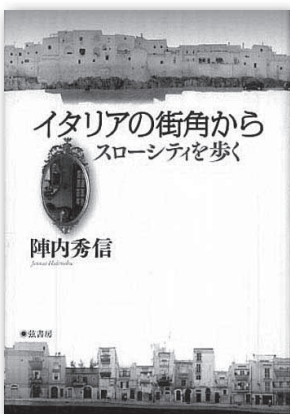
をめぐると実情を教えてください。

特集で紹介したように、世界遺産の保護をめぐってはさまざまな問題が発生している。世界遺産条約は、都市化、地域開発、紛争、自然災害などから遺産を保護するためにつくられたものであり、世界遺産とは積極的な保護が必要な遺産のリストということもできる。したがって、その保護は一筋縄ではない場合が多く、ほとんどすべての世界遺産がその保護において大小の問題を抱えているのが実情である。また、世界遺産の登録は、結果としてその周辺地域に大きな影響を及ぼす。その最たるものが観光であり、観光客の受入れが世界遺産を危機的な状況に追いやってしまうことも少なくない。本書では、世界遺産の保護に携わる専門家たちが具体的な事例を示しながら、都市開発、自然災害、観光地化など世界遺産保護に関する課題とその解決に向けた取

組みを紹介している。

また、本書は今年(2012年)で40年を迎えた世界遺産という制度の歴史と今後の展望についても詳しく論じている。世界遺産の定義や範囲は徐々に拡大し、さまざまなタイプの遺産の価値が認められるようになった。例えば、制度が発足した当初は、ヨーロッパ諸国の石の文化遺産の登録が多かったが、次第にアジア諸国の木の文化遺産、アフリカ諸国にみられる土の文化遺産の価値が認められるようになり、その登録件数は増加している。このほか、「文化的景観」という類型の誕生や無形文化遺産条約の締結などにより、世界遺産の内容は多様化の一途をたどっている。

特集を読んで、世界遺産について研究してみたい、世界遺産に関わる仕事に就いてみたい、などと思われた読者にまず読んでほしい一冊である。(清野隆)

イタリアの街角から  
スローシティを歩く

陣内秀信 著(二〇一〇)  
弦書房(二〇五円 税込)

**イ**タリアの都市には、ゆったりとした時間が流れている。「イタリアの街角から——スローシティを歩く」には、イタリアの世界遺産の中で

のんびりと豊かに暮らすイタリア人たちの様子が描かれている。著者は、NHKの人気番組『ブラタモリ』で東京の水辺空間の案内役として登場する陣内秀信氏で

ある。

本書には、ローマ、ヴェネチアなど、どんなガイドブックにも掲載される有名な観光地から、辿り着くための交通手段が乏しい小さな集落まで、イタリア全土の53都市が紹介されている。著者の表現力豊かな文章と色鮮やかなカラー写真は、歴史的な町並みとその中で繰り広げられる人々の生活を想起させ、いずれの都市も他にはない個性的な魅力を持っていることを教えてくれる。

陣内氏は建築史、都市史の専門家である。ヴェネチアをはじめ、イタリア全土の都市を歩き、都市の中の建築、モノUMENT、広場、路地や都市を取り巻く田園風景の中に歴史的な痕跡を発見し、都市の壮大な物語を読み解いてきた。本書を手にとれば、都市の見え方がガラッと変わり、都市を訪れる楽しみが倍増するに違いない。陣内氏の著作を持ってイタリアを旅

する人は少なくない。

とはいえ、本書はイタリア都市の楽しみ方だけでなく、日本の都市空間の将来を考えるうえで示唆に富む内容を提供してくれる。歴史的な都市空間を守ることは簡単なことではないが、イタリア人たちは肩肘張らずに、自然体でそれをやっつけてのける。故郷の歴史と自然を大切にし、その中で育まれる文化をこよなく愛するイタリア人たちは、古いものを現代的な感覚に合わせて巧みに使いこなし、焦らずゆつくりと自分たちが生活する環境に手を加えてきた。その結果としてイタリアの歴史的な町並みは守られ、その中で人々は生き生きと暮らし続けている。私たちが身近な文化遺産を守りたいと考えるとき、本書が紹介するイタリアの都市とそこで暮らす人々の姿が一つの手本になりそうだ。

(清野隆)



# 公開シンポジウム アジアのディアスポラ文学

## — 日本とマレーシアの交流文学事例から

二〇一二年一〇月二七日、観光学部交流文化学科、大阪大学グローバルコラボレーションセンター、日本華僑華人学会との共催の公開シンポジウム「アジアのディアスポラ文学 — 日本とマレーシアの交流文学事例から」が開催された。

2012年10月27日、観光学部交流文化学科と大阪大学グローバルコラボレーションセンター、日本華僑華人研究会、共同主催の公開シンポジウム「アジアのディアスポラ文学 — 日本とマレーシアの交流文学事例から」が開催された。

台湾海峡を挟むいわゆる兩岸四地以外の中国語文学は非国語文学であり、また作家が居住地の国語文学に参加した場合も、多民族社会の中のディアスポラによる文学営為として、ポストコロニアル文学と捉えられるが、中南米、南米の例を除き研究途上にある。

特に日本の華人文学（日華文学）研究は国内研究者にとって喫緊の課題だが、学術研究は個別のケースを除きほとんど行われていない。このシンポジウムでは、日本、韓国の事例を、アジアのディアスポラ文学研究としてほぼ確立したマレーシアの事例（馬華文学）と比較しながら、文学性そのものだけでなく、移民社会と地域社会の変容、アイデンティティの葛藤、バイリンガルと文化移動、ネイティブとディアスポラなどのテーマについて、午前の研究者セッションと午後の実作者セッションに分かれ、活発な議論がなされた。報告者、題目は以下の通りである。

**第一セッション**（ディアスポラの中の華人文学）  
及川茜（神戸外国語大学）「言語意識から見る寓言…李永平と張貴興を例に」  
舛谷鋭（立教大学）「『留学』を超えて — マレーシア女性華人作家の天路歷程」  
廖赤陽（武蔵野美術大学）「日華文学と在日文学における歴史化と『私』…黒孩・柳美里・藤代泉をめぐる」  
金恵俊（釜山大学）「韓国華人文学初探」  
宮原暁（大阪大学）「コメント」

**第二セッション**（日華文学の創作と可能性）  
田原（東北大学）「二つの言語のはざままで — 二言語創作と詩歌の翻訳」  
藤田梨那（林叢）（国士館大学）「在日中国人の文学創作のビジョンと問題」  
張石（中文導報）「東京の傷跡 — 経済格差と文化の衝突に導かれる愛情悲劇」  
林祁（華僑大学）「『』の間の詩人の放逐と放題・田原論」  
廖赤陽「コメント」



二〇一二年一〇月二七日（土）  
立教大学池袋キャンパス  
太刀川記念館三階多目的ホール  
講師  
田原氏（東北大学講師、作家、詩人）  
藤田梨那「林叢」氏（国士館大学文学部教授、作家）  
張石氏（中文導報副編集長、作家）  
林祁氏（国立華僑大学華文学院院长、作家）  
金恵俊氏（釜山大学中国研究学部教授）  
廖赤陽氏（武蔵野美術大学造形学部教授）  
宮原暁氏（大阪大学グローバルコラボレーションセンター副センター長、准教授）  
及川茜氏（神戸外国語大学アジア言語学科専任講師）  
舛谷鋭（本学観光学部教授）



### 最近の観光学部講演会・シンポジウム

開催日	講演者	演題
2012 4/6	王欣 株式会社電通ビジネス・クリエイション局プランナー (2007年3月 立教大学観光学研究科博士課程前期課程修了)	「社会人から見る大学での勉強」
6/5	岩田修二 東京都立大学名誉教授 前立教大学観光学部観光学科教授	「私の観光研究: すべては山から始まった」
7/2	Nguyen Thien Nam Vietnam National University 准教授	「Vietnamese and Japanese culture, the case of chopsticks (o hashi)」
9/28	劉亨淑 韓国東義大学校 ホテル・コンベンション経営学科 副教授	「韓国の文化祝祭について」 「日韓における海女観光の比較研究」
9/29	平野利晃 株式会社JTB常務取締役販売本部長	「JTBの手掛けるインターネット宿泊販売事業」
10/12	中西紀史 NTTビジネス推進本部 抜井ゆかり 株式会社トラベルキッチン代表取締役 村上和夫 観光学部教授 舛谷鋭 観光学部教授	「観光情報の提供と創造、誌面からARまで…!!」
10/27	田原 東北大学講師・作家 藤田梨那(林叢) 国士館大学文学部教授・作家 張石 中文導報副編集長・作家 林祁 国立華僑大学華文学院教授・作家 金恵俊 釜山大学教授 廖赤陽 武蔵野美術大学教授 宮原暁 大阪大学准教授 及川茜 神戸外国語大学専任講師 舛谷鋭 観光学部教授	「アジアのディアスポラ文学 — 日本とマレーシアの交流文学事例から」

---

## 次号予告

2013年7月刊行予定

特集

# 巡礼

筆者紹介 (50音順)

### 羽生冬佳 (はにゆう・ふゆか)

観光学部准教授

1990年東京工業大学工学部社会工学科卒業、1992年同大学院理工学研究科社会工学専攻修士課程修了。博士(工学)。(財)日本交通公社、東京工業大学大学院情報理工学研究科助手、筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授などを経て、2012年4月より現職。専門は観光計画・地域計画。主な著書・論文に『観光の新しい潮流と地域』、「来訪者の観光地評価の構造に関する研究」(ランドスケープ研究no.69-4)、「地域紙「高山市民時報」の記事にみる観光まちづくりに対する住民の意見の変遷」(都市計画論文集no.41-3)(以上共著)など。

### 清野隆 (せいの・たかし)

観光学部助教

1978年山梨県生まれ。2002年東京工業大学工学部社会工学科卒業、2008年同大学院社会理工学研究科博士課程修了。博士(工学)。立教大学観光学部プログラム・コーディネーターを経て、2012年4月より現職。専門分野は歴史を生かしたまちづくり、コミュニティ・デザイン。研究対象は、イタリア共和国ウルビーノ、埼玉県川越、神奈川県横浜市の歴史的建造物の保全活用と町並みの保全。近年は、旧山古志村と石巻市小湊浜の震災復興に関する調査を行っている。

---

## 交流文化

13

2012年12月24日発行

発行人 村上和夫  
編集人 大橋健一

デザイン 望月昭秀  
印刷 千代田巧芸社

---

問い合わせ先

### 立教大学観光学部

〒352-8558 埼玉県新座市北野 1-2-26

TEL 048-471-7375

<http://www.rikkyo.ac.jp/tourism>

---

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

©2012 Rikkyo University, College of Tourism. Printed in Japan.

I S B N 978-4-9902598-9-1

# 2013年度 立教大学観光研究所 公開講座

立教大学観光研究所では、以下の2つの  
観光産業の入門的公開講座を実施しています。  
学生はもちろん、社会人の方々にも広く受講頂けます。

## 旅行業講座

「国内旅行業務取扱管理者試験」  
「総合旅行業務取扱管理者試験」  
のための準備講座

(2013年4月開講7月講義終了)

「旅行業講座」は、毎年10月に全国で行われる国家試験「総合旅行業務取扱管理者試験」とそれに先立ち9月に行われる「国内旅行業務取扱管理者試験」のための準備講座です。旅行業界とその業務に関心を持つ人たちが受講しています。旅行業に必要な専門的、かつ実的な知識を一流の講師陣が、実務経験のない人にもわかりやすく講義します。講義内容は、旅行業法から海外・国内観光資源、旅行実務などの幅広い分野を扱います。

## ホスピタリティ・マネジメント講座

宿泊・外食産業の理論と経営、最新動向を学ぶ

(2013年9月開講12月講義終了)

ホテル・旅館業・外食産業を中心とするサービス産業を、今日「ホスピタリティ産業」と呼んでいます。「ホスピタリティ・マネジメント講座」では、ホスピタリティ産業の基本理念から、マネジメントの基礎理論、マーケティング、人事、営業企画、法律、最新の業界動向といった幅広い分野まで、業界の第一線の実務家を講師に招いて講義を行います。

講座に関する問い合わせは

立教大学観光研究所事務局

〒171-8501  
東京都豊島区西池袋3-34-1 12号館2F  
TEL 03-3985-2577 FAX 03-3985-0279  
Email: kanken@rikkyo.ac.jp  
<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IT/>



# 立教大学観光学部

観光学科 / 交流文化学科

立教大学観光学部は観光学科と交流文化学科の2学科体制です。フィールドを世界に広げ、リアリティに満ちた学びの場を提供するオンリーワンの観光教育を目指します。



立教大学観光学部

〒352-8558  
埼玉県新座市北野1-2-26  
TEL 048-471-7375

学部の紹介や入学案内については

<http://www.rikkyo.ac.jp/tourism>